

『紫式部集』第七十三番歌考

——卒塔婆の目的から読みとる仏の御顔——

長谷川

彩

はじめに

『紫式部集』第七十三番歌は式部が越前から都への帰路の途中で詠んだ歌とされる。

卒塔婆そとばの年経たるがまろび倒れつつ人に踏まるるを

心あてに あなかたじけな 苔こけむせる 仏の御顔み そとは見えねど^①

(足に踏まれている石の中から、あて推量にこれが卒塔婆なのだろうと思うと、ああもつたいない。苔むしていて、仏のお顔がそれだとはわからないけれど。)

〈新潮日本古典集成〉の本歌の「仏の御顔」の注では、「『一切経音義』に塔婆は廟で、先祖の尊貌の意とある。卒塔婆は死者の顔を示すものとの考えによつたものである」と記されており、この歌が死者への憐れみを示した歌であると捉えている。しかし、本当に式部は卒塔婆を死者の顔を示すものとして詠み込んだのか。本稿ではこの一首についてさらに詳

しく考察するため、①卒塔婆の種類、②卒塔婆の目的、③仏の御顔とは何を示すか、の三点に注目し、新解釈に迫る。

一、卒塔婆の種類

これまでの研究では本歌の卒塔婆の材料や形、種類等について詳しくは考察されておらず、不明であった。よって、本稿ではこれらを探り、またこの時代の背景や資料等を参考に推測してみる。

まず詞書きの「まろび倒れ」から卒塔婆の形を考察する。「まろぶ」は①ころころころがる、②倒れる、という意味を表わすが、②で取ると後ろの「倒れ」と意味が重複してしまうため、ここは①の意とする。ころころ転がるということは、倒れた卒塔婆（の一部）は丸みを帯びた形であると考えられる。木の卒塔婆は板でできているため、丸みを帯びているとは言いがたい。つまり、これは石の卒塔婆であると推測される。

また、「人に踏まるる」という文から、道に転がった卒塔婆は人に踏まれる程度の大きさでありそれほど大きくはないと判断できる。

以上の二点より、倒れて踏まれている卒塔婆（の一部）は、丸みを帯びた小さめの石であったと考えられる。

次に、該当する形質の卒塔婆の具体的な種類を推測する。

卒塔婆は梵語 *stupa* の音訳であり、本来釈迦の骨とされる仏舍利を安置する施設であったとされる。それが中国・韓国を経て日本に入ってきて、仏塔として多様な形を生み出していった。平安時代後期には既に様々な石塔（石の仏塔）が存在しており、その中から先ほどあげた条件に合うものとしては五輪塔があげられる。五輪塔とは五つの形の石が重なった石塔で、石の各層には種子という梵字が刻まれている。

五輪塔は普及率も高く、この時代には無数に存在していた。それを指摘している資料として、以下のものがある。

・新谷尚紀氏^③

「五輪塔は中世に作られた石塔の中でもっとも一般的で数の多い石塔だといえることができる」

・千々和到氏^④

「塔は木造のものが大きくてめだつが、石造の小さな塔のほうが、数的にはずっと多く、ほとんど無数にあるといつてよい。とくに中世以降、日本では五輪塔や板碑・宝篋印塔などが石で多数つくられている。」

千々和氏はまた五輪塔が多い理由として、小塔供養がこの時代に盛んだった点や、本来密教の色が濃い卒塔婆だが、その他の宗派でも受け入れられ使用されていた点を述べている。

以上の点より、紫式部が京への帰路の途中、道で見たという卒塔婆は、この時代に多く存在した石の五輪塔であると推測する。

二、卒塔婆の目的

岩波古語辞典^⑤で卒塔婆を引いてみると以下のような説明が記載してある。

そとは【卒塔婆・卒都婆】

- ① 仏陀の舍利などを納める塔。
- ② 死者への供養として、墓の上に建てる塔。方柱状の石、あるいは細長い板の上部に塔の形を刻みだしたもの。表面には梵字や経文が記される。

そのほかの辞書でも卒塔婆は供養・墓標等のために建てられるものであると説明されており、卒塔婆の目的は供養・墓標にあると捉えられる。また山本氏は本歌の卒塔婆を、「死者を葬った場所に建て墓の標とするもの」とし、墓標ととらえている。

しかし、水藤真氏は「石塔はいつも墓塔とは限らない。それは仏教における作善の一つであった」と指摘し、卒塔婆の目的の多様性をあげている。⁸⁾

1、作善行為の為の卒塔婆

『宣胤卿記』（永十四年四月十二日条）による作善目録には、卒塔婆の造立、仏供・霊供、華香・灯明・茶湯を備えること、念仏を唱えること、阿弥陀経、浄土三部経を书写すること、施餓鬼を行うことなどが作善であることとされ、卒塔婆を立てることが作善行為につながる。

2、平和への祈願の為の卒塔婆

『大日本史料』に「五月廿六日、丁丑、依宣旨、諸司諸家起石塔、依疾疫也」という一文がある。これは正暦五年（九四九）に流行した疫病の災いから庶民を救うべく、諸司・諸家に石塔造立が命ぜられたことを示すもので、これにより平和への祈願を目的として卒塔婆が建てられることもある。

以上のように、卒塔婆は①墓標、②作善行為、③平和への祈願、など複数の異なった使用目的があるものだということがわかった。しかし本歌の卒塔婆がどういった目的で建てられたものかという記述はなく、その目的は不明である。

水藤氏はまた、「善根を為すことは作善であり、それを重ねることは積善であった。卒塔婆を立て、石塔を立てることも、そうしたことのひとつだったのである。当然、墓にも石塔が立てられた。しかしそれはあくまで作善なのであり、必ず墓に

は石塔を立てなければならぬという、必要不可欠のことではなかったのである。しかし造塔は善根なのであって、そうした方がよいことであつたのである。そういうわけで事実石塔が墓に建てられたのである。当然墓以外に石塔が造立された例もあるし、墓に石塔が立てられていなかったり、また別のものが建てられた例もある。」とも述べており、「石塔と墓標」の関係よりも、「石塔と作善」の関係の密接性をアピールしている。

この時代、多くの卒塔婆が前述の目的で造られた。しかし、仏教的意義をもつて建てられた卒塔婆だが、建てられた後あまり手入れをされなかつたようで、その結果、本歌に見られる卒塔婆のように、苔むしたり朽ちているものは決して少なくなかつたようである。それを証する資料として、『今昔物語集』の一話を例にあげ¹¹⁾。

然テ行ク程ニ、道チ辺ニ朽チタル卒觀婆ノ喞ゆがみタル有リ。此レヲ見付テ、手迷てまひヲシテ丸ビ下ヌ。(略)衣ノ頸ビヲ引キ立テ、左右ノ袖ヲ搔キ合セテ、二重ニ屈かがまひテ、卒塔婆ノ方ヲスガ目ニ見遣リツ、御随人ノ翔かまフ様ニ翔テ、涙タテ、卒塔婆ノ前ニ至テ、卒塔婆ニ向テ手ヲ合セテ、額ヲ土ニ付テ、度々礼拝シテ、屈リ翔フ事微妙シ。然シテ卒觀婆隱テゾ馬ニ乗ケル。如此卒塔婆ヲ見ル毎ニ為レバ、一ひと道みち下リ乘リ為ル程ニ、時中ニ可行ゆくべキ道ヲ、卯ノ時ヨリ申ノ時ノ下ル程ニゾ、六条ノ院ノ宮ニヤ着タリケル。

これは寂心という慈悲深い心を持つ聖が、その信仰深い心のせいで極端な行爲をしばしばして周りを呆れさせることがあつた、というあらすじの話の一部である。右の記述では、六条院に呼び出され早く行かなければならない道中にも関わらず、途中で朽ちた卒塔婆を見付けた寂心がわざわざ馬から降り、恭しくお参りし、しかもその後卒塔婆があるたびに同じ事をする。そのせいで二時間以内でいけるはずが十一時間もかかり、御供の舍人を呆れ返させたという内容であつた。

この話からは、当時道に（朽ちた）卒塔婆が大量にあったことが読み取れる。また朽ちた卒塔婆に敬意を示す寂心が変わった人物として描かれ、かつ御供の舎人がその行為で呆れかえっている姿から、当時の人はあまり卒塔婆に仏教的神聖性を抱かず、お参りすることもあまりなかったのではないかと推測される。

では、なぜそのような卒塔婆が大量に存在したのか。

これは、平安時代の死や葬儀に対する考え方による。平安時代、貴族は極端に穢れを嫌い、したがって「死」をも極力遠ざけようとした。そのため墓地は京の外に作られ、京の中は清浄に保たれるように大層気を配られていた。

山中裕氏はそれらの観点や藤原一族の実例を踏まえて、以下のように説明する。

当時は夫婦別葬の習慣で、女性の葬送はもっぱら里方で行われ、藤原氏出身の後妃たちもこの木幡に葬られた。ところが、墓といっても石の卒塔婆を一つ立てるばかりで、埋葬の後に木幡の地へ子孫が詣でる習慣がなかった（中略）平安貴族は、祖先を祭り、死者の供養は手厚く行ったが、墓参りは苦手で、ために親の墓さえよく所在を知らないという有様であった。これは両墓制の名残ともいえ、骨の埋葬地はいわば捨て墓で執着はなく、追善供養の仏事ももっぱら故人ゆかりの寺院や私邸で行われた。¹²⁾

人々は墓標として一応卒塔婆を立てても、きちんとした供養の仏事は卒塔婆のある場所ではなく、寺などで行った。つまり、人々は卒塔婆に対してそれほどありがたがっておらず、執着も薄かったと思われる。

墓標としての卒塔婆への意識が薄いならば、人々は卒塔婆を何のために建てたのか。柳田国男氏の『民俗学辞典¹³⁾』で「墓」を引くと、以下のような説明がある。

以前は葬地に印を設けるとしても、手ごろな石を一つ載せておくとか、樹を植えるとかする程度のものであり、それすらしないで埋葬地点が直きに不明に帰することが多かった。その石碑を建てる時期も、三回忌・七回忌はおろか、十三回忌とか十七回忌とか極めて遅い習わしが多く、早く建てることを忌む觀念さえ濃厚であり、この方面からも石碑は葬地の印というより、むしろ供養塔に出発していることが考えられる。初めは祭るたびに生木などを建てていたのが、卒塔婆となり、板碑となり、今日一般にみるような墓碑にまでなった。

右記より、柳田氏が卒塔婆の存在意義を墓碑に代わり供養塔にあると記していることがわかる。また『墓の民俗学』では卒塔婆の目的を、次のようにも考察している。¹⁴⁾

すぐにお詣りするための目的で建てられたものでもなく、ましてや永久におまいりするための目的で建てられたものでもない。とすれば建てることに何か重要な意味をもつもので、つくる事に意義があるものと考ええる。

以上のことより、卒塔婆の建てられた目的は墓碑としてよりも、供養塔としての意味合いが強く、それを建てたということに大きな意義があったと考察される。それ故、当時苔むしたり朽ちた卒塔婆を道中見かけることは特に珍しくなく、人々が卒塔婆に詣でることもあまりなかったと考えられる。

三、「仏の御顔」とは何を示すか

〈新潮日本古典集成〉では、「仏の御顔」¹⁵⁾「先祖の尊貌」¹⁶⁾「塔婆」¹⁷⁾「卒塔婆」¹⁸⁾「死者の顔」として、卒塔婆を墓碑とし

た解釈として考察されている。この場合だと、私は「死者の霊。また死骸」という訳があてはまると考えられる。そうすると、全体として「苔むした卒塔婆が転び倒れて踏まれているのを見て、死者に対して畏れ多い」と紫式部が感じたという解釈になる。

しかし、これまでの考察から卒塔婆を朽ちてもあまり気にならない死者の供養塔として捉えると、人々が卒塔婆が朽ちることに対して死者への罪悪感を抱いたとはあまり考えられない。きちんとした供養は他で行われ、卒塔婆は建てられたことによりその存在意義をすでもう確立しているのだ。よって、ここでは仏を死者の霊ととり死者の墓標である卒塔婆が苔むし踏まれて畏れ多い、と捉えるのではなく、仏は仏のままストレートに捉え解釈することにする。

次に「御顔」の捉え方を探る。先ほど卒塔婆の具体的な種類を五輪塔と考察した。五輪塔の石には一つ一つ種子という文字が刻まれている。種子とは梵字の一字で仏像を表わしたもので、密教ではとくに重要視されている。種子について『梵字事典』¹⁵では以下のように説明されている。

淨嚴の『悉曇三密鈔』には、「種子の字はすなわち是れ仏菩薩の身なり」とあり、種子はもともと人格化された仏尊の相そのものを示すもの。

これより、種子が仏の身を表わしていることが読み取れる。よって、この「種子」が苔むしていることを、「仏の御顔」が苔むすと表現されているのではないかと推測する。

また、新谷氏は五輪塔について、以下のように記述している。¹⁶

新義真言宗の覚饒の『五輪九字明秘密釈』などの密教の教えるところでは、世界を構成する五大元素をあらわし、

またこの塔の形は大日如来を象徴することも説明されている。

つまり、種子だけでなく五輪塔の形そのものに仏を見出すことも可能となる。そうすると、「仏の御顔」は「五輪塔そのもの」を指すとも推測される。

以上のことより、「仏の御顔」とは卒塔婆に彫られた種子、あるいは五輪塔そのものを示し、死者の顔ではないと考察する。

おわりに

人々が卒塔婆を供養塔として捉え、建てる事自体に意義を見出し、その後の朽ちていく姿にあまり関心を払わなかった時代に、式部はあえてそれに目をつけ、卒塔婆から仏の姿を見出し、その朽ちて人に踏まれる姿を嘆いた。七十三番歌は彼女の鋭い観察眼・豊かな感受性を示すと共に、あまり歌に使われない卒塔婆という素材を使うという、獨創性を表わす歌でもあるだろう。因って、本稿ではこの歌を「墓標が朽ちた死者への憐れみの歌」ととするのではなく、「朽ちた卒塔婆から見受けられる仏への畏れ多さを訴えた歌」と新たに解釈し直し、最後にその現代語訳を示しておく。

卒塔婆の年を経て古くなったのが、転び倒れたままで人に踏まれているのを見て、

当て推量でこれが卒塔婆（五輪塔）の一部だと思うと、ああ恐れ多いこと。それは苔むしてしまつて仏の御顔ともいえる種子も見えないし、仏の化身ともいえるお形も崩れ倒れてしまつて、とてももうそう（仏の御姿）とは見えないのだけだ。

注

- (1) 山本利達〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記 紫式部集』(新潮社、昭和五十五年二月)
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 新谷尚紀ほか『民族小事典 死と葬送』(吉川弘文館、平成十七年十二月)
- (4) 千々和到『日本史リブレット31 板碑と石塔の祈り』(山川出版社、平成十九年八月)
- (5) 大野晋ほか編『岩波古語辞典 補訂版』(岩波書店、昭和四十九年十二月・平成二年二月補訂版)
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 水藤真『中世の葬送・墓制——石塔を造立すること——』(吉川弘文館、平成三年十月)
- (8) 注(7)掲出書を参考に要約。
- (9) 東京大学史料編纂所『大日本史料 第二編之二』(東京大学出版、昭和五年十月)
- (10) 水藤真『中世の葬送・墓制——石塔を造立すること——』(吉川弘文館、平成三年十月)
- (11) 馬淵和夫ほか〈新編日本古典文学全集〉『今昔物語集②』「卷第十九 内記慶滋ノ保胤出家語第三」(小学館、平成十二年五月)
- (12) 山中裕ほか『平安時代の文学と生活 平安時代の儀礼と歳事』(至文堂、平成三年十二月)
- (13) 柳田国男『民俗学辞典』(東京堂出版、昭和二十六年一月)
- (14) 井阪康二の「卒塔婆考」(『近畿民俗』第五五号、昭和四十七年二月)を岩田重則が『墓の民俗学』(吉川弘文館、平成十五年十二月)四十四頁に再録したものを引用。
- (15) 中村瑞隆ほか『枕字事典』(雄山閣、昭和五十二年四月)
- (16) 注(3)に同じ。

(はせがわ・あや 文学部国文学科三年)